
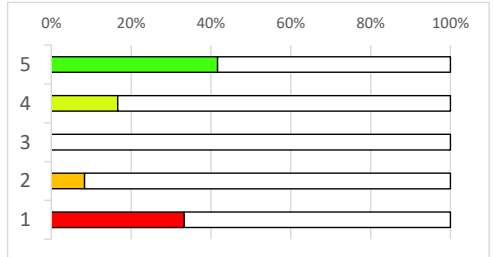


長期モニタリング計画 評価項目の評価シート（イメージ）

資料 8

評価項目	Ⅲ 遺産登録時の生物多様性が維持されていること。
評価項目選定理由	世界自然遺産として登録された基準(クライテリア(x)生物多様性)である。
評価案の作成主体	エゾシカ・ヒグマWG
評価年月	2020年12月
評価対象期間	2012年～2022年（ただし一部のデータは2011年以前のものも使用）

総評 <div style="border: 2px solid yellow; padding: 10px; display: inline-block;"> 評価値 <h1 style="margin: 0;">3.3</h1> 注視すべき状態 </div> <div style="margin-left: 10px;"> 良好  要改善 </div>	<各モニタリング結果の評価分布>	3.25
		

<注視すべき状態>
 一部の海鳥・淡水魚の減少傾向及び外来種（アライグマ・ミンク）の分布動向に注意が必要だが、その他の主要なモニタリング対象は良好な状態と考えられ、遺産地域全体としては生物多様性への大きな問題は認められない。

No.	モニタリング項目	評価基準（概要）	個別評価	数値化
3	アザラシの生息状況の調査	アザラシ絶滅のおそれが生じていないか		5
4	海域の生物相、及び、生息状況（浅海域定期調査）	遺産登録時の状況が維持されているか		5
6	ケイマフリ・ウミネコ・オオセグロカモメ・ウミウの生息数、営巣地分布と営巣数調査（令和2年度第1回海域WGから記載）	遺産登録時の営巣数が維持されているか		1
8	知床半島全域における植生の推移の把握（森林植生/海岸植生/高山植生）	1980年代以前の状態に回復しているか		2
9	希少植物（シレットコスミレ）の生育・分布状況の把握	希少植物の個体群が維持されているか		5
11	陸上無脊椎動物（主に昆虫）の生息状況の把握	遺産登録時と比べて多様性の低下が生じていないか等		4
12	陸生鳥類生息状況の把握	遺産登録時と比べて多様性の低下が生じていないか		4
13	中小型哺乳類の生息状況調査（外来種侵入状況調査含む）	遺産登録時と比べて多様性の低下が生じていないか		1
14	広域植生図の作成	高層湿原・森林限界・ハイマツ帯の分布変化が生じていないか等		1
16	知床半島のヒグマ個体群	ヒグマ個体数が顕著な減少傾向となっていないか等		5
18	淡水魚類の生息状況、特に知床の淡水魚類相を特徴付けるオシヨロコマの生息状況（外来種侵入状況調査含む）（令和2年度第1回河川APから記載）	資源量が維持されているか等		1
23	シマフクロウのつがい数、標識幼鳥数、死亡・傷病個体と原因調査（令和2年度シマフクロウ保護増殖検討会で評価予定）	遺産登録時のつがい数等が維持されているか		2月頃に評価予定
⑧	オジロワシ営巣地における繁殖の成否、及び、巣立ち幼鳥数のモニタリング（令和2年度第1回海域WGから記載）	遺産登録時のつがい数等が維持されているか		5
（基礎情報・参考情報に関するモニタリング項目の実施状況） ○：計画どおり実施，△：一部実施，×：未実施				
24	年次報告書作成による事業実施状況の把握			
25	年次報告書作成等による社会環境の把握			
③	「北海道水産現勢」からの漁獲量変動の把握			
⑪	シャチの生息状況の調査			

<p>評価の理由等</p>	<p>（個別モニタリング項目の評価結果に係る背景、評価の理由のほか、評価プロセス等、評価結果に係る特記事項を簡潔に記載。）</p> <p>(8) 各植生の組成等に大きな変化はなく、森林植生や一部の海岸植生についてはエゾシカの採食圧の影響が継続している。</p> <p>(9) シレトコスミレについては、硫黄山地域で株数の減少が見られるため、引き続き注意深くモニタリングする。</p> <p>(11) 外来種セイヨウオオマルハナバチは自然環境でも確認され定着しているが、顕著な増加は見られていない。</p> <p>(12) 鳥類の種組成には大きな変化は見られていない。</p> <p>(13) 外来種（アライグマ）の定着状況や今後の分布拡大に注意が必要。</p> <p>(14) 広域植生図については、今後整備・解析を進める必要がある。</p> <p>その他の主要なモニタリング結果からは、生物多様性への大きな問題は認められない。</p> <p><u>※エゾシカ・ヒグマWG以外が評価する項目（海鳥や淡水魚等）については、各担当WGによる記載をそのまま追記することを想定</u></p>
<p>遺産地域の管理施策に関する特記事項・課題等</p>	<p>（評価項目の評価結果に密接に関連する管理施策として、特筆すべき事項があれば記載。また、管理施策の現状等を踏まえた今後の遺産管理上の課題について記載）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・哺乳類相に関しては、多様性が概ね維持されているといえる。その一方で外来種であるアライグマは、2016年（知床岬）と2020年（灯台管理道）に遺産地域内でそれぞれ確認されており、生態系への影響が懸念される。 ・ヒグマ個体群に関して、顕著な個体数の減少は確認されていないものの、2012年と2015年には大量出没により捕殺数が例年の倍以上となった。 ・植物相に関しては、シカの採食圧の低下による植生の変化を継続的にモニタリングし、引き続き多様性の維持回復を図る必要がある。 <p><u>※エゾシカ・ヒグマWG以外が評価する項目（海鳥や淡水魚等）については、各担当WGによる記載をそのまま追記することを想定</u></p>
<p>今後の遺産地域の管理の方向性に関する意見</p>	<p>（調査手法等へのコメントではなく、上記課題を踏まえた「遺産地域の管理の方向性」等についての助言等があれば、適宜記載。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アライグマが本格的に定着して増加すると在来種への影響も大きいいため、関係機関で連携・協力の上、まずは侵入状況の把握等に努める必要がある。 ・精度の高いヒグマの個体数推定に基づき「知床半島ヒグマ管理計画」の見直しを行うこと及び個体数の動向を把握するための指標を確立することが必要である。 <p><u>※エゾシカ・ヒグマWG以外が評価する項目（海鳥や淡水魚等）については、各担当WGによる記載をそのまま追記することを想定</u></p>

長期モニタリング計画 評価項目の評価シート（イメージ）

評価項目	VI エゾシカの高密度状態によって発生する遺産地域の生態系への過度な影響が発生していないこと。															
評価項目選定理由	ユネスコ/IUCNの調査報告書において勧告されている。（勧告10）															
評価案の作成主体	エゾシカ・ヒグマWG															
評価年月	2020年12月															
評価対象期間	2012年～2022年（ただし一部のデータは2011年以前のものも使用）															
総評	<p>評価値 3.2 注視すべき状態</p> <p>良好 要改善</p> <p><各モニタリング結果の評価分布></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>評価値</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>40%</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>40%</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>20%</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>			評価値	割合	5	0%	4	40%	3	40%	2	20%	1	0%	3.20
評価値	割合															
5	0%															
4	40%															
3	40%															
2	20%															
1	0%															
	<p><注視すべき状態> 一部地域でエゾシカの密度低下や植生回復の傾向が確認されているが、遺産地域の生態系へのエゾシカの影響は引き続き生じている。</p>															
対応するモニタリング項目とその評価	No.	モニタリング項目	評価基準（概要）	個別評価	数値化											
	7	エゾシカ個体数調整実施地区における植生変化の把握（森林植生/草原植生）	1980年代以前の状態に回復しているか		3											
	8	知床半島全域における植生の推移の把握（森林植生/海岸植生/高山植生）	1980年代以前の状態に回復しているか		2											
	10	エゾシカ主要越冬地における生息状況の把握（航空カウント/地上カウント）	生息密度が一定水準以下となっているか		3											
	11	陸上無脊椎動物（主に昆虫）の生息状況の把握	遺産登録時と比べて多様性の低下が生じていないか等		4											
	12	陸生鳥類生息状況の把握	遺産登録時と比べて多様性の低下が生じていないか		4											

長期モニタリング計画 評価項目の評価シート（イメージ）

<p>評価の理由等</p>	<p>（個別モニタリング項目の評価結果に係る背景、評価の理由のほか、評価プロセス等、評価結果に係る特記事項を簡潔に記載。）</p> <p>(7) 個体数調整をした知床岬地区においては、草原においてイネ科草本・ササ類の高さ・現存量が回復し、開花種も増加している。森林では木本類（稚樹など）の回復は認められていない。</p> <p>(8) 各植生の組成等に大きな変化はなく、森林植生や一部の海岸植生についてはエゾシカの採食圧の影響が継続している。</p> <p>(10) 個体数調整を実施している地区では、エゾシカの発見頭数や生息密度が低下し、捕獲による抑制効果が認められているが、目標水準には達していない地区がある。</p> <p>(11) 地表性昆虫では種組成等に大きな変化はみられなかった。エゾシカ高密度地区において指標種の生息密度の増加が見られたが、長舌種マルハナバチ類の増加は確認されなかった。</p> <p>(12) 知床岬地区においてエゾシカの密度の低下後に、森林性・草原性の指標種の生息密度の回復傾向が認められた。</p>
<p>遺産地域の管理施策に関する特記事項・課題等</p>	<p>（評価項目の評価結果に密接に関連する管理施策として、特筆すべき事項があれば記載。また、管理施策の現状等を踏まえた今後の遺産管理上の課題について記載）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エゾシカの個体数調整による植生の回復効果は、特に知床岬の草原において顕著に確認されている。また他地区でも、部分的な回復効果が確認されているため、管理の方向性は評価される。しかし、2016年頃を境に回復の速度が低下しているため、今後も経過を観察していく必要がある。 ・地表性昆虫や鳥類については、現状維持という評価になっているものの、世界遺産登録以前の調査データは不十分であり、評価が困難であった。 ・個体数調整の進展によってエゾシカの低密度化が進み、従来の捕獲手法では効率的な捕獲が困難となっている。
<p>今後の遺産地域の管理の方向性に関する意見</p>	<p>（調査手法等へのコメントではなく、上記課題を踏まえた「遺産地域の管理の方向性」等についての助言等があれば、適宜記載。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・低コストで低密度を維持するための効率的捕獲手法の確立が必要である。 ・植生の回復状況を把握するための指標種やモニタリング手法の確立について、植生指標部会等で継続的に検討する必要がある。 ・エゾシカの個体数調整を継続的に実施して低密度を維持し、引き続き生態系の維持回復を図っていく必要がある。